



■72カンヌ映画祭審査員特別賞 / 国際エヴァンジェリー映画センター賞受賞  
スタニスラフ・レム(ポーランドSF作家)のベストセラー小説の映画化 / ソビエトSF映画の超巨篇 /

未知の世界が待つ宇宙——このはてしなき未知に挑んだ科学者が  
謎の惑星ソラリスに見たものは何か  
理性を持つ怪しき海……そしてせまりくる生命の尊厳と神秘的な愛の輝き!!



# 惑星ソラリス

●カラー・シネマスコープ●モスフィルム製作●

監督アンドレイ・タルコフスキー

●撮影ワシム・ユーソフ ●原作ハヤカワSF文庫「ソラリスの艦のもとに」(早川書房刊)  
●出演ドナータス・ハニオニス ナタリア・ボンダルチュク / ユーリー・ヤルヴェト

*Sovexportfilm* ■日本海映画株式会社■配給



★巨星の死が投げた波紋

映像詩人アンドレイ・タルコフスキーの輝ける才能の夭逝を惜しむ声は、この監督が亡くなって早や半年、ますます世界の映画ファンに高まりつつあります。82年より、海外での製作活動を余儀なくされながら、なお母国ロシアへの望郷の念を作品に貫いて、しかも、現代社会における不条理に迫って世界を救済を祈ってやまなかったこの巨匠の映画はまた、時空を越えて飛翔する映像の素晴らしさと可能性を私達に無限に暗示してきました。この巨星の喪失を悼むのに言葉は不用と嘆かせ、しかも沈黙してこの悲しみを耐える



には我々はいままで余りにもタルコフスキーについて寡黙でありすぎたと、折から映画界に進む改革の動きと相まって、ソビエトの映画人たちはこれまでこの監督が受けた不遇をいま、痛恨の思いで語っています。また87年七月、モスクワの第15回国際映画祭は、これまで未公開だった「アンドレイ・ルブリョフ」のノーカット版を含む全作品の回顧上映を行うなど、タルコフスキー監督作品への研究・評価は母国でも一挙に進みつつあります。アンドレイ・タルコフスキー監督は一九三二年、モスクワの生れ。卒業製作「ローラーとバイオリン」(61)ニューヨーク国際学生映画コンクール一位)で衆目を集め、つづく長篇第一作「僕の村は戦場だった」(62)でヴェネチア映画祭金獅子賞を受賞、この映画は戦火に巻きこまれ、バルチザン活動に加わることになった少年の苛酷な現実生活と、その少年の記憶に残る平和な日々との対比にみちた描写で、当時、世界的な反響を巻き起こしました。以後、「アンドレイ・ルブリョフ」(67)カンヌ映画祭批評家連盟賞受賞、「惑星ソラリス」(72)カンヌ映画祭審査員特別賞他、「鏡」(75)「ストーカー」(79)を製作、その後は海外で製作を行い、「ノスタルジア」(83)カンヌ映画祭創造大賞他、「サクリファイス」(86)カンヌ映画祭審査員特別大賞他)の二本を遺して、八六年十二月二八日、パリに客死しました。

モスフィルム製作



提供：ソヴエクスポートフィルム  
配給：日本海

アンドレイ・タルコフスキー  
監督作品

# 惑星ソラリス

СОЛЯРИС

★SF映画に新境地を拓いた「惑星ソラリス」72年、カンヌ映画祭審査員特別賞、国際エヴァンジェリー映画センター賞を受賞した「惑星ソラリス」は日本でも七七年四月、岩波ホールにてロードショー公開され、さらに翌七八年七月より銀座・日劇文化で二ヶ月に渡って続映されました。ポーランドのSF作家スタニスラフ・レム原作「ソラリスの陽のもとに」を映画化したこの作品は「未知との遭遇」を人間の肉内に光をあてて描くことで科学文明の進歩の狭間にある人間の苦悩を浮彫りにするなど、これまでのSF映画に見られない新たな地平を拓いた画期的作品として多くのファンを魅了し、同年キネマ旬報ベストテン五位に選ばれました。また、原作にはない、地上のプロローグが、東京・赤坂見附にロケーションして撮影された未来都市のシーンのショットも話題となりましたが、タルコフスキー監督の来日はこの時が最初にして最後でした。公開当時、「二〇〇一年宇宙の旅」と双璧を争った「惑星ソラリス」は、単にSF映画としての斬新さだけでなく、遺作「サクリファイス」にも見られるごとく、人間の心の深層を映像に昇華させつづけたこの監督独自の世界が広がる代表作として歴史に残る名作となりました。

「……二〇〇一年宇宙の旅」では人間の征服欲の原罪をさぐったが、「惑星ソラリス」はもっと深く夢想の実現というか、人間の永遠のテーマたる不死へのさぐりを入れたSFなのである。——淀川長治氏(映画評論家)「週刊少年マガジン」77年6月5日号より

■あのスタンリー・キューブリックのメカニックな啓示とくらべると、タルコフスキーのこの映画は、もっと情緒におぼれた悲しげな美しさを持っている。

——「読売新聞」77年5月11日付より

★ソラリスの海は理性を持つ奇怪な有機体映画はプロローグ(地上の現実)とエピソード(惑星での未来)を持つ3時間の大長篇で、ドラマは主として惑星ソラリスに到達した宇宙船の内部で凄絶に繰り展げられる。心理学者クリス(ドナータス・パニオニス)は重大な任務を帯びて惑星ソラリスに近づいて行く。同行者は物理学者のサルトリウスと医師のスナウトの2人。クリスは、船内に居る苦もない美しい女の姿を或る日発見する。しかも彼女は数年前に若くして死んだ彼の妻ハリイ(ナタリア・ボンダルチュク)その人であった。クリスの驚き!

ソラリスの海は、理性を持つ奇怪な有機体で、地球から来た人間の脳裡に潜在する欲求を物体化する不思議な超能力を持っていた。その1つがハリイで、彼女はクリスのことをすべて生々しく記憶していたのだ。ソラリスの海の謎の解明にクリスははるばる立つ……。

＜キャスト＞  
ハリイ……………ナタリア・ボンダルチュク  
クリス……………ドナータス・パニオニス  
スナウト……………ユリー・ヤルヴェト  
サルトリウス……………アナトーリー・ソロニーツィン  
クリスの父……………ニコライ・グリニコ

＜スタッフ＞  
製作……………モスフィルム 1972年  
原作……………スタニスラフ・レム「ソラリスの陽のもとに」  
脚本……………アンドレイ・タルコフスキー  
F・ガレンシュテイン  
監督……………アンドレイ・タルコフスキー  
美術……………ミハイル・ロマージン  
音楽……………エドゥアルド・アルテミエフ

上映時間 2時間45分/カラー・ワイド  
72カンヌ映画祭審査員特別賞  
国際エヴァンジェリー映画センター賞

ソラリスの海は、理性を持つ奇怪な有機体で、地球から来た人間の脳裡に潜在する欲求を物体化する不思議な超能力を持っていた。その1つがハリイで、彼女はクリスのことをすべて生々しく記憶していたのだ。ソラリスの海の謎の解明にクリスははるばる立つ……。

9月5日(土)より  
アンドレイ・タルコフスキー  
追悼ロードショー

伊勢丹斜め向い・丸井メンズ館先  
新宿 東映ホール1  
(351)3022

特別鑑賞券1200円  
好評発売中(当日一般1500円・学生1300円)  
(都内各プレイガイド、チケットゼン、チケットぴあ他にて)

連日	12:10	3:20	6:30
----	-------	------	------